

---

# Tranquillo ~存在について~

佐久良 響

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Tranquillo ～存在について～

### 【Nコード】

N7267R

### 【作者名】

佐久良 響

### 【あらすじ】

「オバケっていると思う?」

二人だけの教室に響く、麻衣の唐突な質問。

これは、俺と麻衣による、ある日の穏やかな会話。

## （前書き）

飲茶様主催の企画「哲学的な彼女」への投稿作品です。  
誤字脱字の修正と、改行の手直し以外は、原文のままです。  
気軽に読んで頂ければ幸いです。

「ユウ君。 オバケって、いると思う？」

がらんとした、ムダに広く感じる教室の中で、麻衣は窓から外を眺めながら言った。

「は？ オバケ？」

えらく唐突な事を申されますな、この人……

「そう！ オバケっ！」

語尾に でもついてそうな、えらくご機嫌な声だ。

「オバケねえ……」

机に座った 正確には、机を椅子がわりにして腰掛けた俺は、机のすぐ近くの窓辺に立って、楽しそうにニコニコしながら、窓の外を眺める麻衣を見遣りながら首をひねった。

「とりあえず、その質問を繰り出すに至った経緯を教えてください」

「経緯……」

麻衣が振り返る。

セーラー服を身につけた身体は細身で華奢。

小柄で、あまり背の高い方じゃない俺よりも頭半分低い。

十分整った小柄な顔は、それでもまだ少し幼さを残し、美人というよりは、かわいいと言える。

大きくてよく動く瞳が、今は純粹な疑問の光を浮かべている。

2、3歳の子供が、見たこともない昆虫に偶然遭遇した時に見せるそれと同じだ。

「そう、経緯だよ経緯」

大事な事なので2回言いました。

「どうして？」

麻衣はちよつとむくれた顔になる。

どうしてツツコむ所そこなの？　みたいな、そんな事を聞いて欲しいんじゃない、とでも言わんばかりだ。

いやいや麻衣さん、ココ十分ツツコミ所ですよ！

「いや、だつてさ、何の脈絡もなく突然出てきたよね？　オバケって。　オバケが出てきそうな話題とか全くなかったよね？　むしろ、オバケと全く無縁な話してなかった？　俺達。さっきまで」

どう考えても、ナチュラルな流れで出てきたワケじゃないよね、麻衣さん……

「むー」

麻衣がジト目になる。

「どうしてそんな事気にするのかなぁー。ユウ君？こういうのにそういうのは関係ないんだよ？」

麻衣は俺の顔をのぞきこむようにして、自分の顔を近づけてくる。

麻衣さん、指示語が多いッス……

ってか、なんか諭されてね？ 俺……

「……関係ないんですか」

「そうだよ！ こういうのはロジックじゃないんだよ？ アートなんだよ？ フィーリングなんだよ？ なぜかなぁー、って思った瞬間が大切なんだよ！」

わたわたと大きな身振りで説明する麻衣。

分かってもらおうと必死になってるのが伝わってくる。

必死な感じが、ちょっと……いや、かなり可愛い。

麻衣がこんなふう子供っぽいのは、普段からなんだけど、改めて見ると、やっぱり可愛く見えてしまう。

「ああ、分かった分かった。フィーリングな？」

このままだと、麻衣の必死形態（さっき命名）がずっと続きそうな

ので、軽く理解を示しておく。

「…………むー」

麻衣は不服そうだ。

細められた大きな瞳が、本当にわかってるの？　とでも言いたげな光を湛えている。

この調子だと話が進みそうにないので、俺が話を戻す。

「それで、何だっけ。　オバケがどうのって話だったけど」

「どうのじゃないよお！　オバケっていると思う？　って話だよお！」

再び必死形態の麻衣。

ただ、今回は俺がフォローに入る前に自力で元に戻る。

「全くう…………ユウ君、いつもせうやって大事な部分だけ忘れるんだからぁ！」

頬をぷくつと膨らませて、お怒りを顕にされる麻衣さん。

麻衣いわく、「本当に怒った、こわいこわい顔」らしいのだが、正直、恐いとか以前に逆に可愛い……

…………卑怯ですよ麻衣さん。

「悪い。冗談だよ。ちゃんと覚えてるから」

「むー……本当に？」

「ああ。オバケっていると思うか？　って話だろ？」

「……むー」

間違えるわけない。

ついさっき麻衣が自分で答えをバラしたんだし……

まあ、麻衣が答えをバラさなくても普通に覚えてたんだけどな。

つか、麻衣自身、答えをバラした自覚ないみたいだな……

「覚えてるんなら、最初からそう言ってよお！　ユウ君の冗談は、本当みたいで笑えないよお！」

ちょっと拗ねたような、非難がましい雰囲気纏う麻衣。

からかわないでよ、とでも言いたげなオーラ。

「悪かったよ。ゴメンな？」

別にからかったつもりはないけど、麻衣がそう取ったなら悪いのは俺だ。

なので、素直に謝る。



「ふーむ……」

麻衣は少し考え込むそぶりを見せて、

「謝ってくれたし、いいよ！ 特別に許してあげましょー！」

再びその顔に、こぼれそうなほどの笑顔に戻る。

思わず、呆然と見入ってしまうほどの、破壊力抜群の笑顔が。

「それよりも、本題だよ本題！ 話がすっかり逸れちゃったよ」

麻衣は慌てたように仕切直すと、今度はその顔に、興味津々の笑顔が浮かぶ。

「それで、ユウ君はどう思う？ オバケっていると思う？」

「オバケねえ……」

なんせマトモに考えた事なかったからなあ……

少し頭をひねった後、俺は自分の考えを口にした。

「いないんじゃない？」

「おー。 ユウ君は、いない派さんですか」

麻衣は、俺のアンサーに同調するでも反発するでもなく、ただ受け止めた。

「まあ、な。科学至上主義でもないけど、すでに心理学で証明されてんじゃない。オバケなんて、人の意識だか妄想だかが作り出したマボロシだって」

いつだったか、興味本位で手に取った心理学の本に、そんな感じの事が書いてあった。

もっとも、斜め読みしただけだったから、細部はイマイチ覚えてないけど。

「だから、「オバケ」がマボロシだから、《オバケ》はいないって、ユウ君は思っの？」

非難するでも、問い詰めるでもない、純粹な質問。

「　　というか、アレだよ。マボロシとしての　オバケ　はいるけど、昔の人が《オバケ》って定義したような、幽霊とか妖怪とかはいないんじゃない？」

「それは、「オバケ」がマボロシだって、心理学で証明されたから？」

「まあ」

「なるほどー」

なぜか上機嫌なご様子で再び窓際に立つ麻衣。  
開かない窓の向こうに広がる景色を、機嫌よさそうに眺めている。

「…………でもね？」

窓の向こうの景色を眺めながら、麻衣は言った。

「それって、《オバケ》がない事の証明になるのかなあ？」

俺達の他には誰もいない教室に、麻衣の声が響く。

「……………どういう事だよ？」

「だからあ、「オバケ」がマボロシだって証明されたから、ユウ君は《オバケ》はいないって思うんでしょ？　でも、「オバケ」がマボロシだっていう証明は、《オバケ》はいないって事の証明になるのかなあ、って」

二人だけ。

この教室には、他に誰もいない。

「「オバケ」はマボロシだって証明は、《オバケ》の全体集合に対する証明じゃなくて、ある一つの部分集合に対する証明でしかないんじゃないかなあ……………」

……………ああ、入ってるな。

麻衣スイッチ。

普段は仕種も言動も子供っぽい麻衣だけど、たまにこうして、今までと全く変わらない調子で、えらく難しい事を語り出す。

俺はこれを、麻衣スイッチと呼んでる。

この時の麻衣の話は、現代文のテストに出てくる評論並みに難しい。

そして、この時の麻衣は、普段よりも楽しそうに　　そう、生き生きしてるんだ。

「はあ……」

話についていけなくて、曖昧な相槌を打つと、

「つまり、こういう事だよ。来て！」

麻衣は、眩しいほどの笑顔で俺に笑いかけると、今にもスキップしそうなほど上機嫌な足取りで、教室の前面　　ちょうど、俺が座る机以下、全ての生徒用の机と向かい合う面に、当たり前のように存在している深緑の巨壁、黒板に向かう。

俺も机から降りて、麻衣についていく。

麻衣は黒板の前に立つと、

「えーっと」

白チョークで何やら描き始めた。

俺は、黒板の前に偉そうに鎮座する教卓の隣に、教卓に追従するようにして置いてある生徒用の机（たぶん、数が足りなくなった時のための予備なんだろう）に、さっきと同じく腰掛けて、作業する麻

衣に　　というか、麻衣の書く図形に目を向けた。

まず描いたのは、フリーハンドの割には結構きれいな円。

続いて、その隣にもう一つ、やっぱりフリーハンドの割にきれいな円ができる。

ただ、最初に描かれた方の円よりもサイズが大きい。

次に麻衣は、二つの円の上部を、ちょうど黒板消しが近くになくて仕方ないから指で消すみたいに、中指でゴシゴシこすって消す。

二つの円は、視力検査の時に使う、あの一部が欠けた円になる。

ちなみに、視力検査の例えで言うなら、二つとも上を向いてる。

麻衣は、二つの円の欠けた所に、それぞれ『オバケ』と書き込んだ。

「オバケ？」

「そう！　図にした方が分かりやすいかなあーって」

「そうか？　……えらい抽象的というか、俺の頭にあるオバケのイメージと随分違う気がするんだがな……」

「オバケの『絵』じゃないよお！　オバケの『図』だよお！  
ユウ君、もしかして分かってて言ってる？」

再び不機嫌な表情で俺の顔を覗き込んでくる麻衣。

「……き、気のせいだろ？」

「　　本当かなあ？」

「気のせいだつて。　　　それよりも、このオバケの図、どうしたんだ？」

「あつ、コレ？　ユウ君に説明するための、特製オバケ図だよ」

「俺に説明するための？」

「そう！　さつき私言つたよね？　「オバケ」がマボロシだっていう証明は、《オバケ》はいないって事の証明にならないんじゃないかなあ、って」

「ああ、言つたな」

「そうしたら、ユウ君よく分からなさそうな顔してたでしょ？　だからこういう事なのか説明しようと思って」

「……つまり、『「オバケ」がマボロシだつていう証明は、《オバケ》はいないって事の証明にならない』ってのがどういう事なのか、この図を使って説明してくれるわけか」

「そうっ！」

無邪気な笑顔で頷くと、麻衣は自分が描いた二つの『オバケ』に向き直った。

「まず、ユウ君は《オバケ》はいないと思っています。《オバケ》  
《いない派さんです。 どうしてかと言うと、《オバケ》はマボロ  
シだって心理学で証明されたからです」

麻衣は一拍置いて続ける。

「つまり、ユウ君の頭ではこんな図が描かれています」

麻衣は、小さい方の円の下の辺りに「ユウ君のTheory」と書き込  
き込むと、その円の内側に、ちょうど数学の領域図示みたいに、薄  
い斜線を何本も引つ張っていく。

「線を引つ張った部分は、ユウ君が、《オバケ》はマボロシだって  
証明を適用した範囲です。 つまり、この線の部分にいるのは、本  
当の《オバケ》じゃなくて、マボロシとしての オバケ です」

斜線は、円の内側全体に渡って引つ張られている。

「……ああ、なるほどな。 この図だと、確かに『マボロシとしての  
オバケ 』はいるけど、本物の《オバケ》はいない』になるな」

「オバケ」は存在しないわけじゃない。

仮に存在しないとしたら、「ユウ君のTheory」の上に『オバ  
ケ』の円を書く必要がないからだ。

「オバケ」は存在する。

しかし、それはあくまでも人の意識が作り出したマボロシとしての存在でしかない。

マボロシとしての オバケ 。

俺の考えを的確に表している。

「……それで、ここからが私の考え」

麻衣は、もう片方のサイズの大きい円の下に、「麻衣のTheory」と書き込んだ。

こっちの大きな円で説明するみたいだな。

「私の考えは、『オバケ』がマボロシだっていう証明は、『オバケ』はいないって事の証明にならない』、です。 何度も言うだけだね。 ……で、それは図にすると、こうなります」

麻衣は、サイズの大きい『オバケ』の円の中に、もう一つ、小振りな円を書き入れた。

「麻衣のTheory」の『オバケ』は、円を二つ持った、いびつな二重丸になる。

続いて麻衣は、新しく書き入れた小さな円の内側に、薄い斜線を何本も引っ張っていく。

「オバケ」がマボロシだって証明は、確かにある程度は「オバケ」



に対して効力を持つんだけど、その効力が及ぶのは、この小さな範囲だけなんじゃないかと思います」

ひとしきり斜線を書き入れると、麻衣はチョークを置いた。

「つまりね？ ユウ君」

相変わらず、楽しそうな笑顔が俺に向けられる。

「私はこう思うんだ」

言いながら、麻衣は俺が座ってる机まで寄ってくると、俺の隣の狭いスペースにちょこんと座った。

それこそ、肩が触れ合いそうな距離だ。

「おい……！」

慌てる俺をよそに、

「いいでしょ？ 隣、座らせて？」

眩しいほどの笑顔でそう言われるんだから、拒絶できるわけなかった。

俺の隣に座った麻衣は、相変わらず笑顔のまま、ただ、どこを見るでもなく視線を泳がせながら話し始める。

「世の中には二種類の「オバケ」が存在してるんだと思うの。両方とも、昔から認められてきた、れっきとした「オバケ」だったん

だよ。 だけど最近になって、その内の片方が、実は人間自身が作り出したマボロシだったって分かった。それから私たち人間は、オバケなんてマボロシだ。そう、ちょうどユウ君みたいに、「オバケ」は全部マボロシなんだって思ってしまった。マボロシとしての オバケ の中に本物の《オバケ》も含まれてしまったんだって」

何とはなしに、「ユウ君のTheory」に目が行った。

内側を全て斜線で埋められた『オバケ』の円。

全てを虚構と決めつけられた「オバケ」。

「なぜなら、マボロシとしての オバケ も、本物の《オバケ》も、人間にとっては同じ「オバケ」だから」

「……だから、片方がマボロシだって事になったから、《オバケ》も必然的にマボロシになった いや、マボロシにされた、って事か？」

「そうつ！」

麻衣は笑顔のまま、軽く目を細めた。

「だからね？ 本物の《オバケ》もいるんじゃないかなって思うの。私」

二人だけ。

「もちろん、私には、本物の《オバケ》が本当にいる事を証明でき

ないから、これはあくまで可能性の話でしかないんだけどね」

この教室には、他に誰もいない。

「定義には、必ず、過剰に包含してしまっている要素が、少なからずあると思うの。だから、そういう過剰に含まれてしまった要素を探してみるだけで、もっと、違う可能性が見えてきて、物事が違ったふうに見えてきて、おもしろいと思わなかなあ？ ユウ君」

そう言っただけで向けてくる笑顔は、自然と俺にこう返させていた。

「かもな？」

そう答えた俺の顔が、微笑んでいるのが分かった。

「……」

麻衣は微笑んだ。

今までに麻衣が見せた笑顔の中で最高に可愛い笑みを浮かべて。

麻衣は微笑んだ。

二人だけ。

他には誰もいない。

俺達他には誰もいない。

二人だけの教室。

「……ねえ、ユウ君」

視線を虚空へと向けながら麻衣は言った。

「ん？」

俺も視線を宙に泳がせながら答える。

狭い机の上に二人で腰掛けながら、二人で同じようにして、何を見るでもなく虚空を眺めていた。

二人だけ。

他には誰もいない。

「……あのね？」

そう言った麻衣の声は、心なしかためらってるようにも聞こえた。

「何だよ？」

「……えっとね、あの……」

……

「……もしも、もしもね？『ここ』以外にも『世界』があるんだとして」

二人だけ。

「その『世界』が『ここ』よりもずっと楽しくて過ごしやすい場所  
で」

他には誰もいない。

「私はその『世界』に行く事ができなくて」

俺達その他には誰もいない。

「でも、ユウ君はその『世界』に行く事ができたとしても」

二人だけの教室。

「それでも」

二人だけの『世界』。

「……『ここ』についてくれる？」

「……」

視線は虚空に向けたままだった。

麻衣の顔を視界にとらえる事はなかった。

「……ずっと、一緒にいてくれる？」

「……」

答えは

随分昔に出ていた。

だから

「……」

「あっ……」

ただ、手を重ねた。

机に置かれた麻衣の左手に、俺の右手を。

「……………ああ」

その小さな、はかなげな手を包み込むように、そつと。

「ずっといるよ。俺は」

包んだ手を、きゅっと軽く握りしめる。

「麻衣のそばに」

二人だけの『世界』。

……………

……

…

どれだけ、無言の時間が過ぎただろうか……

「……………」ありがとう

微かな麻衣の声。

麻衣の温もりと重みを右半身で受け止めながら、俺達はどこを見るでもなく、虚空を眺めていた。

開かない窓から差し込む色のない光が、教室を白く照らしていた。

二人だけ。

他には誰もいない。

俺達その他には誰もいない。



二人だけの教室。

二人だけの『世界』。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7267r/>

---

Tranquillo ~ 存在について ~

2011年10月7日16時12分発行